慈濟ものがたり

234

慈濟基金會
2016年6月

TZU CHI ● ツーチー

2016 ● 6

慈濟ものがたり

NO 234 慈濟基金會

今月の表紙

花蓮静思堂の銅門での浮き彫り

１９６６年、仏教克難慈済功徳会が設立された頃、證厳法師は台湾東部の貧しい人々を見るに忍びず、自ら三十個の竹筒貯金箱を作り、志のある三十人の主婦に渡されました。そして毎日買い物かごを手に取る前に五毛銭を竹筒に入れて、人助けの善念を新たにし、市場では善の種子を蒔くようにと願われました。

表見返し●

文・證厳法師／訳・済運／撮影・涂鳳美

広い心と純粋な思い
大きな願と揺るぎない志

心からの誠意と美しい善があれば
広い心と純粋な思いになれます
そうすれば
逆境でも初心を忘れることはありません

自分の無私を信じれば
願は大きくなり志も揺らぎません
他人の愛を信じれば
力が湧いてきます

目次

【社論】
志を立てて大道を歩む　慈願／訳　4

【特別報道・慈済五十】
初志を貫く
❒仏教克難慈済功徳会の設立　慈願／訳　8
❒愛と信心で打ち立てた慈善の半世紀　慈願／訳　18

【人文風景】
人道的建築の旗手
簡志明（上）　黒川由希／訳　32

【證厳法師のお諭し】
できうる限り愛の力を出そう　慈願／訳　44

【特別報道・日本熊本地震】
熊本は元気だ！　済運／訳　56

【人生のプレゼント】
前向き、それとも及び腰　心嫈／訳　68

【国際援助・セルビア】
難民が通り過ぎて行くセルビア　済運／訳　72

【衲履足跡】
菩薩の絆を縫い合わせ
雑念を打ち払う　黒川章子／訳　98

慈済大事記【四、五月】　済運／訳　105

広い心と純粋な思い、大きな願と揺るぎない志　済運／訳　表見返し
漫画《清らかな智慧》　済運／訳　裏見返し

【社・論】

志を立てて大道を歩む

◎訳・慈願

慈済（ツーチー）は今月で、設立五十周年を迎えました。半世紀の時代変遷を経て、鍛錬成長してきた源には「志を守り道を奉ずる」堅い精神と信念がありました。

慈済の済世（世人を救済する）志業は、多元的でかつ幅広く、国際間においては心身苦難の所に軽量化を以て救難救助してきました。た慈善団体であるだけではなく、教化の道場でもあります。無数の人が「菩薩道を歩む」が故に声をかけあい集まり、自身の浄化を得るとともに深くこの大道を歩んで行くことを願っています。

三十年前、慈済は慈善から済世へと基礎を盤石にし、医療では花蓮に病院を建てました。病院を建てるまでの七年間には度重なる試練に直面しました。資金の調達、土地や人材の確保など難問が山積みでした。多くの慈済人や各界人士が、證厳法師に「法施は財施よりも重要です。法師は精力を弘法利生に注がれたほうが気楽ではありませんか？」と勧めました。

上人は「仏教の教理のもとは社会に適用することで、以前は道理を説くことに重点をおいていました。しかし仏法を広めるために慈済は事を以て、社会大衆に仏法の慈悲喜捨の道理を認識してもらわねばなりません。法施の功徳も大きいが、身体を以て努める慈済功徳もおろそかにできない上に、この功徳は無限ですよ」とおっしゃいました。

上人の志は堅く、また人々の慈悲と善の念もまた雫も岩をも貫くほど堅いと信じておられました。東台湾の民衆を護る仏教病院が終に落成し、それから医療スタッフは病だけでなく心のケアにもあたってきた様は、まるで薬師如来が

東方に瑠璃の浄土を開拓されているがごとく感動的でした。教育と人文の志業も引き続いて行い、人性の価値を再建することに着眼しました。

慈済人が人間（じんかん）の道を歩くのはたやすいものではありませんでした。凡夫が菩薩になるためには、習気（じっけ）を改めなければならず、偏見や否定にあっても心から柔和と忍辱の工夫を凝らすことです。対内や対外を問わず、すべての機会が心を鍛え、仏に学ぶ因縁でした。

この菩薩の訓練場では、如何にして小善をもって世の中に愛と善の循環を累積してきたかを実証しています。年配の慈済人が上人に追従して、誠を以て布施し、苦しむ人たちを慰め済度してきた行いは、法施と無畏施をも含めて今日の在家菩薩の模範となっています。

仏法の実践と法を広める需要がある時には、時、場所、人の縁にしたがって適宜に行います。半世紀以来、慈済の志業内容は多岐にわたり、人心と社会の需給に応じながら、心願である修行大道を実践してきました。

釈迦の早期の仏教経典《四十二章経》に記載されています。仏曰く「博聞愛道、道必難会。守志奉道、其道甚大」、仏亦曰く「行道守真者善、志与道合者大」と。心に芽生えた菩提を大きく成長させ、誰彼に非難を受けても屈せず、真を以てとこしえに仏道に努め励んでこそ、人格を最大限まで高めることができ、また生命の最高境地に達せられるということです。

慈済は五十年来「志を守って道を奉じる」仏法精神であり、さらに多くの善士を集めて、「志に従って大道を歩む」ことをこれからも伝え広めていきます。

慈済五十 初志を貫く

190 心靈篇 篇

2. 人心的淨化

有人說，上人最令人佩服之處，
是將估去全國一半人口的婦女動員起來了。
許多家庭主婦踏進慈濟道場法門之前，開時不是泡美容院，
就是逛珠寶店和委託行。上人以慈善爲婦女開闢了一條新路，
以「忍辱負重」的佛家精神[illegible]在家庭中重新定位；
有愈來愈多的婦女，忻慕[illegible]「尋衣」的藍色旗袍，
它代表著一種母儀懿德的風範
妻子改變，做丈夫的自然就被[illegible]
到 78 年，「慈誠隊」的組織就這樣
男衆的剛毅果斷，與女衆的貞靜[illegible]
使悲智平行雙運，這眞是最本[illegible]
慈濟人所在的地方充滿了笑容，
充滿了關懷，充滿了愛，
使企業家硬綁綁的心整個就溶化了
在追求利潤之餘，也負起企業家回饋社
心安而後事安，家齊而後國治。
欲求人心淨化、社會祥和、世間無有災難，已

成長中的委員

資深委員群像

59年花蓮市成功街大火時，慈濟委員
在第三聯合救難救時所攝，前排男衆
右起：思度林川惠、柯萬玉、思齊子
文逮。思齊後來轉向佛理的研究，與
慈濟漸行漸遠，直到78年發心學佛以
行菩薩道最篤究竟時，委員號已由22
落到1328號，此後精進勇猛，目前在
大甲推動慈濟會務，成果斐然。後排
右起：靜哲、靜慨、靜慈、靜恆、靜
航、靜賢(後)、靜得(前立戴眼鏡者)
、靜仁、靜祖、靜誠、靜敬。靜哲往
生前以不能見慈院落成爲憾，想必已
乘願再來。靜慈爲花蓮的老大師姊，
一往無悔，道路上人歷三十餘載。靜
得已逝，幸有子媳林琪雲、顏美月承
繼慈濟志業。(圖1)

圖2

訪貧救苦

國爲59年12月12日，上人率領委員至風林探訪黃阿恩祖孫時，不料遊覽車陷入山興溪中，委員不顧天寒水冷，合力推車的景象。慈濟委員秉佛心、承願志，以慈悲喜捨之心，起救苦救難之行。從早期委員懷念貧病，開始訪貧救苦的工作，正是抱持著不懼艱難、不畏險阻的精神，無論由有多麼高峻、路有多麼崎嶇難行，總是奮勇堅毅，一往無悔的邁步前行。早期委員這份難行能行、難忍能忍的精神，爲來日無量無邊的慈濟人樹立了人間菩薩行的典範，一直延續到今天。(圖2)

圖3

[illegible]員靜銘師姊（左起第二人），帶領一部
[illegible]其中有靜怡、靜湯、靜暉、靜妊四
[illegible]者。當時北自基隆、宜蘭，南到
[illegible]歷。由於當時北迴鐵路尚未
[illegible]山精舍當出錄音帶，內有
[illegible]絕，再錄下個人感
(照片提供：靜思)

文化志業 191

仏教克難慈済功徳会の設立

難を克服する志を以て慈済（ツーチー）を立ち上げてから、数々の試練があった。それでも仏の慈悲深い「抜苦与楽」という志は、如何なる艱難にあっても、衆生のためという思いからさらに強く堅くなっていった。

◎文・慈済月刊慈済歴史編集組／訳・慈願
写真・慈済花蓮本部

一九六六年の五月十四日は、旧暦の三月二十四日にあたり、この日に「仏教克難慈済功徳会」が設立しました。

その時、證厳上人は北埔農場の地蔵廟（花蓮県秀明郷佳民村普明寺）に借り住まいをしておられ、他には三人の弟子、平慧永と荘是の二人のお年寄り、時々手伝いにくる荘是の孫娘紹愈がいるだけでした。

設立の日は厳かな式典は行われませんでした。普明寺の小さな仏堂の中に二十枚の座布団を三列に敷き、その場所いっぱいに人々が集まりました。上人がお経の講釈をされた時から縁を結んだ人々です。彼女らは上人が花蓮にとどまって、慈善活動をされるよう強く願っていました。

上人は功徳会の名称についてその由来を説明されました。「お金がなく、人数もたった数人しかいませんが、私たちには信心があります。救済活動は『克難する（難を克服する）』ことから始まるのです。慈とは『富める者に教える予楽』、済とは『貧しい者を救う抜苦』であって衆生の欠点を補うことです。『慈済』には『教富済貧』と『抜苦与楽』の精神がなくてはならないのです」と。

この世には多くの苦があります。その

慈済功徳会設立の日、上人は普明寺の本殿を借りて「薬師法会」を行い、皆と《薬師経》を読経されて、薬師仏の大願を学ぶよう励まされました。

苦の中には物による苦しみと心の苦しみがあります。慈済の設立は、物が欠乏しているという苦しみから解放するだけでなく、さらに徹底的に心霊を苦から解き放つためなのですと強調されました。

社会では多くの人が、仏教とは迷信で単なる神頼みを求めるものと誤解しています。実際は、仏教とは人性の最も素晴らしい完全な教育です。もしも仏法を生活化し、菩薩を人間化することができて、仏法が社会に普及すれば、人々は平和で自在な日々を送ることができると信じています。

慈済は仏教を主体とし、「慈悲を心に、済世を志に」した組織です。私たちは仏法を以て人々の良知を啓発し、さらに良能を発揮するように導いていかねばなりません。

毎日人助けの五毛銭を貯金箱に入れてから野菜を買いに行った

その頃、台湾東部の貧しい人々を見るに忍びず、上人は裏の竹やぶに入って自ら三十個の竹筒貯金箱を作り、志のある三十人の主婦に渡されました。そして毎日買い物かごを手に取る前に五毛銭を竹筒に入れて、人助けの善念を新たにし、市

場では善の種子を蒔くように、と言われました。

主婦たちは市場の店々で「私たちの師匠は、毎日五毛銭を貯めていると、大きくなって困っている人を救えると教えています」と善行を伝えると、市場の買い物客、魚や野菜売りたちの善心はみるみるうちに触発され、善行の灯は次々に燈されました。そして「私にも竹筒を下さい」と、毎日のように功徳会に加入を希望する人が現れました。

上人はこの様子を、「人それぞれ愛の心を持っていることの証です」と言われました。人々の善念は因縁によって啓発され、物が豊かでなかった時代の素樸で純粋な善の人心に五毛銭の募金というやり方が響き合って、三十個の竹筒は無数に増え、「仏教克難慈済功徳会」竹筒歳月の幕開けとなりました。

家庭の主婦の竹筒以外に、精舎に常住する出家僧が作るベビーシューズも収入源になりました。功徳会が設立して二カ月後には千百七十元になり、慈善基金として貧民救済と救難活動に使われていました。

是非の声を教育と思って聞き 心穏やかなら道も穏やかに

二十九歳になられた上人は、普明寺で弟子たちと自力更生の厳しい生活の中で、苦難の人を救済しておられました。この慈しみに多くの家庭主婦は感動していましたが、五毛銭に対する疑問と批判の声が上がっていました。

「自分たちも満足に食べられないのに、どうやって人を助けられるの？」という冷たい言葉。「それは清廉潔白とは言えない、自力更生などといいながら、今の生活もままならないのだから、偉そうに慈

慈済50・初志を貫く

善団体を組織してこの機会に募金だといって金を集めるんだろう、全くあざといもんだ」という様々な誹謗が上がっていました。

この声は上人の耳に入りましたが、驚かれず、悲しみもされず、志を放棄することはありませんでした。出家修行して以来、小さな小屋住まいから慈善院、普明寺の借り住まいなどの苦しかった道々には、多くの「逆増上縁」が堅い道心を養い育てていました。

「もしもすべての生涯が順調にいっていたら、私の自修は自分を度する自分だけの一生で終わったでしょう。もしもいろいろな所を経て慈善院でお経を講ずることがなかったらこの弟子たちとの結縁を結ぶもなかったでしょう。さらに病院の床にあった血の痕を見ていなかったら慈済の発願はなかったでしょう」と。

お体の弱い上人は「衆生のため」に慈済建設の意志は何よりも堅く、他人の誤解を自分への激励と見做して「私はただの小さな人間に過ぎません。なにを気にすることがあるでしょうか？　自分を犠牲にして多くの人が幸せになればいいのです、他人がどう見るかなど気にすることはありません」とおっしゃいました、

上人は普明寺の裏にある松の木を見上げておられました、荒れ狂う夏の台風、秋の風、寒風の冬にも負けず、緑の陰を作って人々の憩いの場所になり、また虫たちを守っているように、千万の撃砕に遭っても、強い根を張っていれば逆境も滋養になって菩提の種子を育むのだと自分を励まされました。

「是非」を「教育」として感謝の気持ちでその傷を癒し、この警告を「衆生のため」と担うことを決め、如何なる声があっても心が平静なら穏やかに道を歩くことができると信じておられました。

これは《無量義経》の経文「静寂清浄、志玄虚漠、守之不動、億百千劫」の考え方で、「衆生の為」という堅い志願は永遠に不動でした。「因縁は一瞬にして過ぎ去るもので、方向は正確だと信じたら志願を堅持し、道が如何に険しくても信心、気力と勇気を持って前進すると、遂には平坦に歩くことができる」ということです。

愛と信心で打ち立てた慈善の半世紀

各地から寄せられる少額の寄付金が半世紀の人助けの善行を支えてきた。あらゆる職業からなるボランティアは訪問ケアと済貧の主力。五十年来彼らは真心から台湾の社会的弱者に寄り添いケアをしてきた。

◎文・李委煌／訳・慈願
写真・慈済花蓮本部

二〇一六年の屋外は大雨の上に寒流が襲っていました。ボランティアの陳麗珍は珍さんを連れて慈済会所で行われる年に一度の冬季配付と歳末祝賀会に参加していました。不幸な過去を経験した珍さんですが、麗珍が心を砕いて付き添った甲斐があり、今では立ち直り、今度は自分が人を助けられる人になっています。

台湾各地の冬季配付と歳末祝福会には、珍さんのような悲しい人生を過ごした人が多くいます。貧困や病に苦しむ家庭、一人暮らしの老人といった社会的弱者の家庭を対象とした冬季配付の慈善伝統を、慈済は四十八回連続して行ってきました。

慈済訪問ケアに参加して二十五年になる陳麗珍は、五十年間も慈善組織が歩いてきた意義を考えたことはありませんでしたが、「ただ分かっていることは苦難の人が必要としている時に、私は寄り添って肩を貸し、心の悩みを聞いてあげることができるということです。珍さんが今生活に困らず、人を助けられる人になっているのが一番の喜びです」と話してくれました。

多数のボランティアも陳麗珍と同じく幾十年も単純な心で慈善奉仕をしてきま

●1968年10月、寝たきりの老人が長期ケアの対象、温かい家、米も支給された。重病の時ボランティアは花蓮モンロー病院に入院させ、上人も時おり見舞われた。彼は3年半の世話を経て亡くなった。

したが、すべては自費で時間を割いているのです。喜びを感じ、また未来に対しても平常心をもってやるべきことをやっているだけです。

民間慈善の先駆け

慈済は当事者または第三者から支援が必要であるとの通知を受けると、その地域にいるボランティアを派遣して調査し、状況に応じて援助を行ったり、定期的に訪問ケアを行ったりしてきました。五十年来この方式で続けています。

第二次世界大戦が終わった後、一九五一年から台湾が受けていた米国の援助が一九六五年に終わり、その翌年に仏教克難慈済功徳会が設立しました。この同時期に、家扶基金会、ワールドビジョン、キリスト教芥野種会などの慈善機構が台湾社会に現れたのも偶然ではありませんでした。

今年七十八歳になった郭東曜は、一九六四年に家扶基金会が発足した時からの職員で十年後に台湾家扶基金会の執行長になりました。彼は初期の民間NGOの発展と政府の能力には密接な関連があると話します。戦後の政府は財政が困難であったため社会福祉には手薄とならざるを得ず、相対的に民間組織が発展する空間ができたことが大きかったと言いました。

東曜の父親は医師でしたが、その時代は例外なく物資が欠乏していましたから彼は小学校に上がる前まで靴を履いたことがありませんでした。兵役を終えた後、しばらく中学の教師をしていました。その時の月給は七百八十元でしたが、公務員には米、食用油、塩の配給がありまし

●1977年、上人はボランティアを連れて台東鹿野に訪問ケアへ出かけた。当時56歳の謝さんは一人暮らし、若い頃に戦場で腿に爆弾があたって障害者になり草葺き小屋に住んでいた。慈済は謝さんに10年あまり毎月300元と白米11斤を支給していた。

た。

その後、彼は民間組織の家扶センターの職員になって、月給は倍の千五百元に上がりました。「当時の台湾経済は十年続くことになる経済黄金時代の高度成長期に邁進していました。客間が工場となり、多くの人が退勤後も家で仕事をして、ほとんどが二十四時間態勢で働いていました。国家にも財政を立て直す方法はなく、民間や宗教団体の発展を奨励していました」と話しました。

以前、台北市社会局副局長の周麗華が語ったところによると、台湾社会の救済活動は、民間慈善団体がその先鋒でした。社会の福祉資源も民間から開始して、徐々に政府に主導権が移っていきました。早期の社会福祉は主に貧困者への援助に集中して、それ以外はほとんどありませんでした。児童福祉法案が一九七三年に通過し、その他の社会救助法、老人福祉法などは一九八〇年に通過しました。これは民国七十年以降になってから台湾の社会福祉が徐々に軌道に乗ってきたのだそうです。

人は誰でも善行ができる

半世紀前の台湾経済の状況が良くなかった頃に、貧民救済の浄財と物資の調達は何処からきたのでしょう？

周麗華が台北市のソーシャルワーカーとして勤務していた時は、社会的弱者の家庭が必要としている基本的な生活物資、鍋、布団などを「社会資源帳簿」に登記し、それらが廟などから事務室に贈られてくると白米と一緒にすぐに彼らに供給したものでした。

郭東曜も確かに財源確保は困難だったと語っています。家扶基金会の職員は大部分が教師の出身で、募金へのお願いをなかなか言い出せず、二年もせずに四割の人が離職します。一九七六年家扶は再び親戚や友人たちから募金を集めても、一人の児童を扶養できるだけでした。家扶基金会の財政が台湾人の募金によって自給自足できるようになったのは一九八五年以降のことだったのです。

募金はたやすいものではないことが身にしみていた彼には、慈済が早期から行っていた小額募金は容易ではなかったはずだと理解できます。「小銭が大善を行う『竹筒歳月』の募金は、台湾では慈済が初めてで、それによって多くの人々の善念が触発されていました。

人助けは能力の大小によらないと考えている慈済は、一九八〇年頃、毎月の固定献金額を大体十元、二十元、五十元とし、それを慈済会員から集めていました。花蓮慈済病院の建設後、献金の額は激増し、その浄財は慈済慈善を支える最大の力となっていきました、

近年の統計によりますと、慈済年度浄財の九パーセントが五百元以下の少額です。それをみると、慈済が企業家の援助や政府の補助によって支えられているの

●（上）１９６９年２月、慈済設立から３回目の冬季配付を行った。普明時を借りて４０戸の貧しい家庭に慰問金、白米、布団、衣類を送った。おかげで温かい新年を迎えることができた。

●（下）社会の変遷がどうあろうとも、慈済伝統の冬季配付は中断したことがなく、４８年を越えた。ボランティアは長期ケアのお年寄りを家へ送っている。（撮影／蕭耀華）

ではなく、大衆を網羅して共に善行の道を歩いていることが分かります。

社会における影響力についても、「慈済は強い宗教性と価値の高い活動の力量があるがために、世界中のボランティアが喜んで参与しています。多くの安定した支持者とは一種の社会影響力ですよ」と強調していました。

行動力と不変の信念

台湾の社会福祉制度は一九七〇年代にできましたが、家扶基金会と慈済はその一歩前には開始していました。家扶の職員は役所へ行って片親家庭の資料をもらって、ボランティアが状況の確認に行っていました。慈済は通知を受けるとボランティアが訪問して実地調査をした後、評価して長期ケアをしています。

慈済の慈善方式はその地域に住むボランティアが、その家庭全体の様子を把握して付き添い、各方面の問題と不足を補いながら、彼らが改善し自立できるまでケアをしています。本人だけでなく家庭全員に関心を持ち、生活補助費以外に家庭全員の医療、教育、環境改善など多元的な方面にわたってその家庭の現状に合わせて行っています。

●（上）１回目の冬季配付の後、２０卓の囲炉（ウェルー）（年越しのご馳走）を設けた。一人暮らしや貧しい家庭の人々は温かい年越しのご馳走と家庭の団欒を味わっていた。

●（下）毎年歳末の冬季配付の後、囲炉の伝統行事は花蓮から全台湾に及んで規模はますます大きくなり、慈済の重要な慈善工作になっている。（撮影／蕭耀華）

この「整体制、家庭性」の訪問ケア、援助の対象、方式などの項目は特定、単一したものではないため、豊富なボランティア人力と経費ならびに不変の使命感がなくてはできないことです。

周麗華が慈済と接触して、最も深く印象に残っているのは、独居老人の業務に携わっていた時のことでした。一九九八年一人暮らしの高齢者が孤独死したことが社会問題になっていたので、彼女は社会局を代表して、民間機構に協力を求めました。その時の台北市に、百余りの里（町）にいる独居老人のデータを慈善団体が共同で受け持ってくれましたが、その残りの二百以上の里を慈済が全部引き受けてくれたのです。

「各地域の慈済ボランティアは定期的に、台北市の三分の二の独居老人を十八年間休まずに世話をしてきました。慈済ボランティアたちは移動も少なく安定して通報を受けるとすぐに任務を真面目に果たし、その訪問記録も確かです。最も組織だった民間団体ですから安心して任せられます」と。

正しいと思ったら前進すること

一九九一年八月、上人は「アジアのノーベル賞」といわれる「ラモン・マグサイサイ賞」の「社会活動家賞」を受賞しました。しかしその頃慈済は中国大陸の華東、華中の水害支援に戦々兢々としていました。台中関係の敏感な時にあたって、両極端の見方がありましたが、上人はこの賞の賞金の半分を大陸支援に使ったのです。

上人が賞金を受け取った理由は「台湾の人々にも仏教教理の中に蘊蓄している慈悲、布施心を再認識してほしかったから」でした。慈済は慈善から歩み出して二十五年目、そして最も艱難な時にアジアで肯定を得ることができたのです。

その後、上人は次々にアジアや国際的な賞を受賞し、慈済が設立して四十五年目の二〇一一年、「タイム一〇〇　世界で最も影響力のある百人」に選ばれるという栄誉を獲得しました。

慈済が国際的に認められていることに対して特筆すべき点は、周麗華が民間団体の一員として国連の会議に参加していた頃、政府や民間組織は台湾発効のビザで入場できない中、ただ慈済だけは入場することができたということです。

慈済は社会の脈動に応じて調整していますが、終始慈悲の行動力は不変でした。ネット時代ですから人々は容易に批評

し、疑念を発します。昨年八月の台風で観光地の烏来地区が大規模な被災を受けました。支援に行ったのは大部分が慈済ボランティアでした。被災した住民の多くはキリスト教徒でしたが、みな慈済に感謝していました。

郭東曜は、組織が五十年も発展している理由は、非常に正しい主旨に沿って人々の心を惹き付ける価値のある活動をしてきたからだと言います。慈済、家扶基金会または他の組織が永続するには、健全な財政とその透明化と公開が重要で、機構の長期発展には欠くことのできない要素です、と話してくれました。

慈済は五十周年の前日、国際的にも有名な安侯建業連合会計士事務所（ＫＰＭＧ）と財務査核に署名をしました。事務所主席の宇紀隆は、「慈済が台湾の愛の橋を世界に懸けている意義は非凡です。正しい信念、正しい行動を貫き、また新たな挑戦に立ち向かっています。それにはただ良い事をするだけでは足りず、どのように行うのか計画を立てた後、必ずやり遂げなければならないということなのです」と強調していました。

◆２０１５年度　慈済基金会台湾社会救助概況

社会的弱者の家庭扶助	案件	ケース数；１５６９３件 ボランティア延べ６９５６１人
	長期支援	支援対象世帯累計８９５２５戸 支援対象者２４６７４３人 白米９１７１５キロ 増加戸数３８９６戸 支援停止１４６１戸 ボランティア延べ３９４４８５人
	急難補助	医薬補助３３９２件 葬式補助１８９３件 一般救難補助１１６０３件 ボランティア延べ７３９９２人
	冬季配付	４４場 支援対象世帯１８８７８戸 施療対象者　延べ１８６２人 理容奉仕対象者２３０４人 ボランティア延べ８４３５４人
	家庭訪問	累計１３２９４７戸 ボランティア延べ５６５０７６人
	住居の清掃と安全面の改善	支援対象世帯８９７戸 ボランティア延べ４４０８人
	施療	２４２場 支援対象世帯８２９戸 ボランティア延べ３０３１人

【経典雑誌・人文風景】

人道的建築の旗手 簡志明（上）

◎文・劉怡姿／訳・黒川由希／撮影・楊子磊

交通大学人道的建築実験室の手がけた「竹網室」が新竹県峨眉郷で竣工した。牽引役の簡志明は、人道的建築の夢を実践するため、農村コミュニティでの建設にも協力している。

建築士といえば、みなパリッとしたスーツに身を包み、意気揚々とパソコンに向かって建築業者のための精密な設計図を作図している、というイメージがある。しかし台湾人道的建築協会(AHA ,Association of Humanitarian Architecture)執行長の簡志明は、カジュアルな服装でいつも人道的建築の工事現場に来ては自ら汗を流している。「人道的建築チームはじっくり長い時間をかけて集落や農村の人々とコミュニケーションを取らなければなりません。使用者のニーズを討論してからCADを使って双方にとって理想的な設計図を描き、共同で建設を進めるのです」。簡志明は謙虚にこう話す。

二十八歳の時、簡志明は客家委員会に欧米への視察希望を申請した。視察計画書には、「医者は生老病死を見尽くし、大愛の哀れみを持つ。もし建築家が『住む場所のない女性や子ども、病気や寒さに苦しむ高齢者』について理解を深めれば、きっと善念が啓発されるはずだ」と記した。シュヴァイツァーの医術で人を救うことができるなら、建築の専門家もサポートを必要とする人々を助けられると彼は考えたのだ。

「人道的建築」は、建築家が設計者本位ではなく、現地の人々とコミュニケーションを取り、現地の建材を使用して、みなで協力して一つの建築物を築き上げることを意味する。人道的建築と似た概念の「人道建築」は欧米では既に早くから行われており、多くの欧米の建築士が開発途上国で現地の人々と協力し、現地に必要とされ、かつ現地の文化に調和した空間を作り上げている。

「優れた医師は一度で一人を治療する。優れた建築は一度で何人もの人々を守る」と考える成功大学建築学科副教授の簡聖芬は、簡志明の人道的建築を当初から支持してきた。人道的建築と聞くと一般の人は義務建造住宅を思い浮かべるかもしれない。一つの建築物がなるべく多くの人々の役に立つよう、資源の限られた状況下、人道的建築は公共施設の建築を主としている。

資源を求め募金に取り組む

簡志明は大学院卒業後、一時スランプに陥った。自分のやりたいことをはっきりさせたいとしばらく模索していた彼は、「建築士は社会のために何ができるだろうか」と自問した。その後間もなく、簡志明はある原住民の家屋建設に協力する

機会を得て、南投県双龍集落付近、一千メートル級の中央山脈の山中で作業を行った。現地の生活文化を理解したいと、仕事の合間に付近を歩き回っていた彼は、たまたま双龍小学校の先生と生徒に出会い、同小学校の伝統工芸教室が台風で損壊し、修復できていないことを知った。

二〇〇八年、簡志明は伝統工芸教室が全壊したという知らせを受けた。彼は双龍小学校のため、何か建設的なことができるのではないか、という考えが浮かび、ちょうど行政院での代替役（事務系の兵役）についていたため、資源の豊富な行政院で募金活動を始め、同僚や友人、さらに様々な建築建設組織から十三万元の募金を集めた。そして「果実のさね」の発芽をコンセプトに、現地の住民との討論を経て、果実のさねの形の竹造伝統工芸教室の建設を計画した。

募金は当初、十回に九回は断られ、順調とは言いがたかった。「私の髪型を見て、私が出所者か出家者で、社会奉仕のためにやっているのだと思われることもありました」。簡志明はこう回想する。寄付してくれた人たちに安心してもらうため、また寄付を断わられた

●人道的建築協会の作品第一号―南投県双龍集落の伝統的な竹編で作られた教室。風による空気抵抗を減らすため、アーチ型のデザインとし、またブヌン族の伝統を受け継いで竹を建材とした。（写真／台湾人道的建築協会）

人々にも自分の思いを証明したいと、簡志明は台北科技大学の協力を得て、計画の名義で寄付金の領収書を発行した。またウェブサイトには寄付金の明細も公開し、透明化を図った。

募金以外に、人材も募集しなければならなかった。簡志明の後ろ盾となった簡聖芬は、「お金に関しては、私たちが提供できる額には限りがありましたが、人に関しては、学校には豊富なマンパワーがありました」と話す。簡志明を知る教師たちは、彼を学校に招き、学生たちに人道的建築の理念と進行中の案件について説明する機会を与えてくれた。教師たちはまた、ワーキングホリデーに行くような気持ちで人道的建築に参加するよう学生たちにも呼びかけ、人道的建築はキャンパスで予想外の脚光を浴びることになった。「昨年、交通大学が峨眉コミュニティでの竹造建築に協力してくれた時には、十人のボランティア募集に六十人の応募がありました」。簡志明はこう述べる。

学生ボランティアの応募が定員を超えた時には、面接で選出を行わなければならなかった。面接を担当した教師たちは、選出されなかった学生たちにも、決して彼らに何か悪い点があったわけではないこと、ただ人道的建築には、様々な能力、たくさんの役割を備えたメンバーが必要となるのだということを説明した。簡志明は、「メンバーには専門性の他に、料理や写真、ビデオの撮影、記録などの能力が必要となります」と例を挙げる。

現地の文化に溶け込んだ人道的建築

人道的建築にとって、家を建てることは、多くのステップの中のごく小さな一部分に過ぎない。人道的建築で最も重要なのは、コミュニティに根を下ろして建設することであり、建築技術は二の次である。簡志明は、「原住民集落の人々には共通認識と団結力があります。ただ建築という概念がないので、私たちがサポートに行くのです」と説明する。団結力こそ、コミュニティでの建築を進める核心的力量と言える。

例えば台東県東興村の達魯瑪克集落は、まさに原住民の団結力の強い集落である。二〇一二年、簡志明と台北科技大学建築学科の楊詩弘助理教授は、学生を連れて共に東部唯一のルカイ族の集落に入り、長期的な観察を行った。その結果、多くの子どもたちがルカイ語をあまり話せなくなっていること、集落の老人たち

は子どもたちに母語と民族の伝統文化を伝える空間のあることを望んでいることが分かった。一年近くの時間をかけ、人道的建築チームは集落の長老、牧師、そして子どもたちと討論を行い、建築の雛形が出来上がった。

蝶の形をした「児語記憶亭」はこうして誕生した。ルカイ族にとって蝶は勇士の象徴である。木造の「児語記憶亭」は蝶というトーテムを融合し、大南小学校の木彫の作品を組み合わせ、独自の文化的要素を浮かび上がらせている。かつてのルカイ族が石板で家を建てたのにならい、人道的建築チームは川で石板を採集し、それを地面に敷きつめた。人道的建築は、台北科技大学チームと現地住民の力を結集したのである。

台湾南北から集まってくる大学の教員と学生たちは、どのように集落の住民とコミュニケーションを取るのだろうか。「夜、私たちは焚き火を囲んで討論し、キャッチボールをするようにアイディアを出し合いました」。簡志明は当時の心温まる光景をこう振り返る。集落の長老たちや牧師が膝を交えて語り合ったのはもちろん、子どもたちも討論に加わった。「子どもたちに、建設する空間の想像図を描いてもらいました」。しかし描いてもらった絵を見るや、人道的建築のボランティアたちは自分たちに建てることができるのかと目と目を見交わした。キリンにゾウ、モモンガのいるような空間を、子どもたちは望んでいたのだ。そこで人道的建築チームは、木彫や絵画といった子どもたちの美術作品を通して、彼らの創意を建築の一部分とするアイディアを考え出した。

●台湾海外人道的建築チームは、ネパールのJUGEDIで、計画的に「聯新希望医療センター」を建設した。チームのメンバーは、現地の労働者にレンガを積む技術や機械の使用法、工事現場管理の知識を伝えた。（写真／台湾人道的建築協会）

●（下）児語記憶亭の構想は、ルカイ族の言語を継承するという使命から来ている。
●（左）南投県の羅羅谷集落の「ミニ読書書屋」は、風景と読書空間とを融合させた。

人道的建築チームは短くて二十一日間、長ければ一カ月あまり、現地で生活した。六十歳近い双龍集落の住民の谷自勇は、「みなで一緒に竹や茅の採集に行きましたが、よく蚊にかまれ、また茅であちこち切り傷もできました」と回想する。人道的建築チームは、工芸のプロからボランティア、建築士、大学教授まで、みなが苦楽を共にして一致協力し、全員で炎天下に汗を流して作業し、五分間のシャワーを浴び、地べたに雑魚寝した。そして共に地元の野菜、住民の仕留めた野生動物の肉を食べ、そして一日の労働の後の心地よさを味わった。

集落や農村の人々は、建設された空間を様々な用途に使用している。例えば台東県の「都歴故事亭」は、もともとは先生が子どもたちにお話をするなど、学校のレクリエーションの場所として使われていた。しかしその後住民からの意見によって、長老たちに故事亭に来てもらい、集落の伝説を話してもらうようになった。こうした例は枚挙に暇がない。南投県の羅羅谷集落の「ミニ読書書屋」では、住民が結婚式を挙げたこともある。

（つづく）

【證厳法師のお諭し】

できうる限り愛の力を出そう

◎訳・慈願／絵・林淑女

人に対しては善解に努め
群衆の中に入っては包容し
すべてに感謝して過ごせば
常に足るを知る
愛の力を思う存分発揮して
心と大地を安定させよう

五月に入ってから、台湾では地震が頻繁に発生しています。ただ五月十二日の一日間には九回を越え、マグニチュード五に達したのもありました。これは正常にエネルギーが発散されている状態と言いますが、人もこの信号を注意し、戒を慎みます。心から愛のエネルギーをいつも発散して、慈悲憐憫の心を起こし、この世の苦難を憐れむならば、災難が抑えられます。

近年、アジアでは多くの国々で旱が続いています。インドでは三十万人以上の人が飲み水が不足する危機に陥り、さらに四月には高温のため三百人が亡くな

っています。ベトナム南部では旱続きで土地が塩化しひび割れしたため、農民は休耕を迫られ収入が減少し、生活を圧迫しています。

水は大地の生命です。水が豊富にあっても、ない時の苦しみを思って、晴天の時に蓄えなければなりません。水が自由に使えることは幸せなことですから、日常生活の中で大切にしましょう。

「人は天に勝る」と言われています。しかし人とは時には自分の信念に反発することもあり、自分に克つことも難しいものです。ならば、まして天に勝るなどとは可能でしょうか？　異常な気候に対して人力で抵抗することは困難です。ただ皆が心を調和させると、天地の気候も調和することができます。

旱とは雨が降らず大地に水が欠乏することです。人の心はさらに法水で潤うことが必要です。心が穏やかな時は「他人をほめることは美徳、人の是非を言うと自分の徳を損じる」という道理がよく分かっています。しかし、目の前の境地に左右された時、無明煩悩が理性を覆って怒りが起きると、心の中にある火が燃えさかって先入観にとらわれ、人と人とが対立してしまいます。

＊＊＊

倫理道徳の観念が薄れている現在は人類の一大危機です。心が貪瞋痴に満ちている上に傲慢で疑い深いと、心の中に砂塵が舞い上がり、目先の利は業力を造り世の中を不安にさせます。

常に良い心を保ち、他人に対して善解するよう努め、人々の中に入っては包容し、そしてすべてに感謝して、常に足るを知るならば、人々とよい縁を結ぶことができます。

人々には利点も欠点もありますが、もしも人の欠点ばかり見て、自分の利点を思っていると、人と縁を結ぶことができず、たとえ心に善があっても他人の助けは得られません。反対に、相手の利点を過大視して欠点を包容し、互いの利点を持ちよって社会に奉仕すれば、社会に福をつくることができます

衆生が福業を共にすると、災難をなくすことができます。雨が大地を潤すように、衆生も法水で心を潤し、人々が道理に精通して何事も見極められるようになると、自分の心をはじめ家庭や社会が健やかに、天下は平穏になることができます。

行動を起こせば
道の遠きは恐れず
愛の心が活発になると
力が湧いてくる

四月中旬、アフガニスタン、ミャンマー、日本とエクアドルに相次いでマグニチュード七以上の強震が発生しました。その中で南米のエクアドルに起きた七・八の強い地震では六百人以上が被災し、無数の家が破壊されました。市内は壊滅し、産業は停頓したために、多くの人が職を失いました。苦しい生活の中で、目にするのは傾いた危険な家屋と廃墟ばかり。そんな中で恐怖と不安に襲われ過ごしていることでしょう。

米国、パラグアイ、チリ、ブラジル、アルゼンチンの慈済（ツーチー）人は支援のためにグアテマラに集合し、現地の台湾人ビジネスマンは被災者を慰め世話をしていました。最もひどかった四カ所の被災地で、慈済は「被災者雇用制度」を実施し、被災者は賃金を得ながら自分たちで瓦礫を取り除いていました。彼らは収入を得られるだけでなく、自分たちで郷里を再建し、生気と商気を取り戻して被災後の生活が一時も早く正常にもどるよう力を注いでいました。

慈済人は険しい瓦礫を乗り越えて、被災者の傍らに寄り添っていました。被災者雇用計画に参加していた住民の中には医師、弁護士、市議がおり、傷ついた痛みをこらえ自分たちの故郷再建に立ち上がっていました。その中のフランクという被災者は地震で重傷を負い、妻は彼の胸の中で息を引き取りました。彼は米国からきたボランティアの済覚に、再建の仕事をしている中で新たな生活の目標を探し当て、心は平静になったものの、亡くなった妻のことが忘れられないと話し、慟哭しました。

済覚は彼の手を握りしめ、真心を以て皆の祝福を受け、失った愛の悲しみから抜け出して、妻に対する愛の代わりに周囲の人に関心を寄せるのですと慰めていました。

苦難の多い人生に復興の道は遠いものですが、道の遠いことを厭わずに踏み出すことが肝心です。生き生きとした慈済の愛は、現地で最大の力となっていました。

人生の中で福と禍は予測できず、無常が先にくるか、明日が先にくるか誰も分かりません。人生の無常の苦に対して、時間、空間を把握しお互いに福をつくり合い、善の縁を結ぶことが必要です。自

分は力不足だなどと恐れず、皆で団結すればこの社会に福を作り出すことができます。

心に深い信仰を
大乗の心を起こして
孝行はすかさず行い
方々で善行をしよう

旧暦の四月八日は釈迦の生誕日に当たり、一九九九年に台湾の立法院（国会に相当）では国の祝日に定められました。新暦の五月の第二日曜日は母の日で、釈迦の生誕日と二つの祝日が重なりました。それ以後、世界にいる慈済人はこの日を、「仏誕節、母の日、世界慈済デー」の三節句を祝う日とし、孝行と善念を宣揚し、「善と愛の力を発揮して恨みをなくす」よう呼びかけ、この世が平穏で平和になるよう祈っています。

今年は世界各地で四百六十回、二十五万人以上がこの式典に参加しました。英国の式典では「父母恩重難報経（父母の恩に報い難し）」のストーリーに手話を交えたミュージカルが披露されました。観衆は中国語が理解できませんが、劇を通して孝行とはすかさずせねばならない大切さを痛切に感じていました。フィリピンのマリアナ市では三百人の少女が父母の恩に感謝して親の足を洗う儀式を行い、トクマン市長までがお年寄りの市民を母と思って、かがんでその足を洗っていました。

二〇〇八年にミャンマーが熱帯気流に侵された時、慈済は緊急に長期にわたる復興支援策として種籾を配付しました。農民は収穫を待たずに、慈済の「竹筒歳月」の精神を実行して、毎日お米を洗う時、一握りの米を「米援助の甕」に入れています。甕がいっぱいになった時、自分よりも貧しい人たちに分けるためです。この善行を通して足るを知る彼らの顔には微笑みがたたえられています。

アフリカのモサンビークでは、二千人を超える人たちが灌仏会に参加しています。炎天下にもかかわらず黒人の菩薩たちは熱砂の上で、整然と「真心を込めて三願」の祈祷を行い、彼らの伝統の曲を「仏陀よ！　我が身と心を献上して苦難の人を助けられるように。以前我は我が身を以て間違いを行っていた。しかし今は誠心誠意懺悔と感謝であなたの教えと善に向かい喜んで追従してまいります。仏陀よ！　私たちの声が千も万

もの壁を越えて届きますように。仏法のお教えによって苦難の人たちをお助けできるようお導き下さい」と繰り返し歌っていました。

アフリカは乾燥した貧しい地方ですが、彼らは自分の健康や金銭を求めずに、ただただ仏陀の教導とさらに多くの仏法を求めて、苦難の人を救えるよう願っていました。この純真で敬虔さに溢れた歌声に私は大変感動しました。これが、広い心を以てこの世のために大願を立てていることです。

法を聞いて法を伝え
立願をたて法を護持
人々の心が善に至れば
国土は清浄になる

人にはもとより仏性が具わっています。ただそれが無明に覆われ、無明の中で覚悟の機会が隠されているだけです。平等心をもって世の人に関心を持ち、どの人も未来の仏と見做して、感謝、尊重、愛で相対すると、それが平和な浄土ということです。

この世の至る所が道場です。言うまでもなく、善知識あるいは逆増上縁があっ

ても、警戒しなければならないことを私たちに教えています。良い模範になる人ならその人をよく見て習わねばなりません。道理に明らかでない人は、自分さえよければという考えで人を傷つけます。こうした行為は脱線者で、警戒心が必要ですから、同じような誤ちは起こさないようにせねばなりません。

二千年以上前に、仏陀の侍者アナン尊者は法蔵を護持する願を立てました。仏がお亡くなりになられた後、アナン尊者とカヨウ尊者が協力して経典を集結したので、仏法が今日まで伝えられたのです。皆さんに期待しますのは、アナン尊者の編纂した法を聴き、法の知識、法の護持を学ぶことです。群衆の中に入って優しい言葉をかけ、我慢強く衆生を済度し、菩提の道を切り開いて善の種を撒き、この世にいる苦難の人々の「覚有情（悟り）」の功徳林になることです。

志に専念し
この一刻を把握して
分秒分かたず
一切成就のために

今年の四月三十日は旧暦の三月二十四日で、慈済創立五十周年にあたり

ます。五十年前のこの日に「仏教慈済功徳会」が花蓮で設立されました。この道を歩いてきた五十年の間では、最初の信念と志願を終始不動の精神で守り続けてまいりました。

「今」のこの刹那は、指ではじくようにすぐさま「過去」となって「未来」がやってきます。過去、現在、未来のすべては、現在の一刻をもって成就しますから、永遠にこの一刻を把握しなければなりません。心は瑠璃のように清らかに、煩悩を複製せずに、たとえ渦巻く黄塵の中にいても揺るぎない初心を保つことです。慈済人たちの志は、愛を以て着実に志に専念し、正確な方向に向かって進み、精進することであり、それは常にゆるぎないものでした。それ故にすべてを成就させることができたのです。

「千里の道も始めの一歩から」と言われるように、未来無数の五十年は今をもって始まります。心の内に「誠正真実」を備え、身では「慈悲喜捨」を実践するよう期待しております。

「人心の浄化、社会の平穏、天下に災難のなきように」ということが、私の毎年の三願です。また「三つの求めず」とは私が一生学ばなければならないことです。一、我が身の健康を求めず、ただ智慧の鋭敏を求める。二、すべて思い通りになるよう求めず、ただ信心、気力、勇気を求める。三、負担が軽くなることを求めず、力量が増えるよう求める、ということです。

命は年月と共に消え去り、老いて死えば遂には土に帰りますが、慧命は永続することができます。明敏で煩悩に縛られず、その煩悩を菩提に化すと慧命は増します。人生において意のままにならないことは十中八九ありますが、信心、気力、勇気を堅くもって何事にも当たることです。責任が重いことを恐れず、苦難の衆生を慰撫する力を求めなくてはなりません。

一人の力は微々たるものですが、皆が菩薩心を啓発し、共に奉仕して愛の力を必要とする所へ普及させてゆきましょう。皆さんのさらなる精進を期待しています。

【国際援助・日本】

熊本は元気だ！

◎文・陳静慧・呉恵珍／訳・済運／撮影・呉恵珍・孫素秋

九州の熊本で強い地震が発生してから、慈済ボランティアは大津町の避難所に泊まり込み、家に帰れないお年寄りたちに付き添った。

毎日一時間、静思茶を入れ、夕方には温かい食事を提供する。その合間に皆で体操をしたり、楽器を演奏して楽しんでもらうことで恐怖を拭い去り、元気になってもらうのだ。

●熊本県阿蘇郡南阿蘇村の家屋は酷く損壊した。南阿蘇村では１５人が死亡し、１人が行方不明になった。

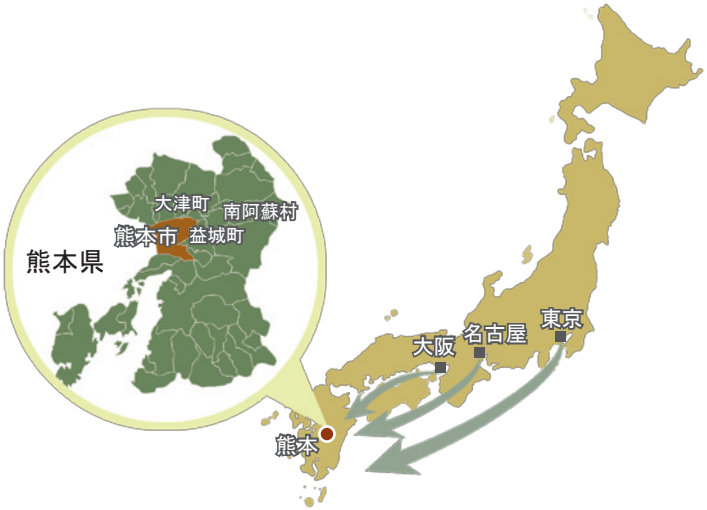
熊本地震

日時：２０１６年４月１４日夜９時２６分、九州熊本県益城町を震源地とするマグニチュード６・５の地震が起きた。それは４月１６日未明に起きたマグニチュード７・３の本地震の前触れだった。気象庁はそれを「平成２８年熊本地震」と命名した。

被害状況：死者６８人、行方不明者１人、負傷者１６５２人、損壊家屋７５０００棟余り。

建て物の損壊や道路の寸断で水道やガスなどのインフラが使えなくなり、被災後１カ月経っても１１０００人余りが避難生活をしている。

慈済の支援：４月２２日、状況把握のために被災地に出向き、震源地から遠くない大津町を支援拠点に選定した。東京、大阪などからボランティアが５月１４日に一段落するまで、リレー式に支援を続けた。



四月二十二日から五月十四日まで、私たちは熊本の被災者と一カ月弱、共に過ごした。

慈済の重点支援地区は熊本県中央から北よりにある大津町である。総合体育館が避難所に当てられ、大津町や南阿蘇村立野区の住民約千人が避難した。自衛隊が毎日二回おにぎりを提供し、ボランティア団体である熊本インドネシア協会が毎日一回、五百人分の温かい野菜スープを四月二十四日まで提供した。私たちは炊き出しすることを決め、住民たちにも参加してもらった。二十四日の午後、町内の主婦たちが包丁やまな板を持ち寄り、エプロン姿でやってきた。あたかもプロ集団のように、役割分担した後、野菜を洗って切り、初回の炊き出しで四百人分のスープを提供した。

被災地の学校は五月九日まで休校になり、生徒たちはこぞって私たちのボランティアになってくれた。人数が多ければ力量も大きくなるとはこのことで、キャベツチーム、ニンジンチーム、白菜チームなどに分けて作業をした。初めてボランティアをした子供もろい、これも初めて包丁を握ったため、切ってもらった野菜の大きさはさまざまだった。そして、彼らは雨が降る中、何度も行き来して食事を届け、若々しい元気な声が曇り空に差し込んだ日光のように広がった。

私たちが持参した静思小葉紅茶とウーロン茶は住民や職員たちに、とても美味しいと好評だった。「地震発生から毎日、味のない水ばかり飲んでいました」と、お爺さんとお婆さんが日本人のお茶に対する思いを話してくれた。避難所の住民は熱いお茶が飲めることを待ちわびていた。

●大津町総合体育館が臨時の避難所になり、現地の人は余震が減り、水道や電気の供給が回復するにつれ、帰宅して行った。阿蘇山に近い住民は土砂災害や道路の損壊で直ぐには帰れなかった。

避難所の人数は日毎に減った。会社勤めや家の整理をするため戻って行く人や急いで借家を探す人など。若い人は素早く方法を見つけてそこを離れて行った。そこから出られない人は皆、家屋の損壊が激しいお年寄りばかりだった。彼らは避難所の毎日が長く感じられるようになった。

私たちはお茶の時間に子供たちを連れて行った。そして、お爺さんやお婆さんに大きな笑顔で対応するように言った。それが子供たちにできることであると同時に、お年寄りが最も期待していることでもあるのだ。震災後、大人たちが焦り心配する中、子供たちも何かしたいと思っていた。それ故、彼らは私たちを真似て、お辞儀して両手でお茶を差し出し、優しく語りかけた。その時から彼らは避難所の愛に満ちた天使となった。

お爺ちゃん、お婆ちゃんはにぎやかなのが好き

國武春代さんは九十二歳の姑を連れて避難して来た。ボランティアの差し出した熱いお茶を飲んで緊張していた情緒が一気に解け、ボランティアの肩に顔を乗せて感動の涙を流した。家は損壊し、余

●ボランティアが避難所の一画にいた女性とその姑を見舞い、慰めた。

●避難所では物資は豊富だが、住民は温かい食事や野菜、果物を求めている。東京、山梨、長野、大阪などからボランティアが飛行機や新幹線を使って集まり、現地の住民と共に炊き出しをした。

●地震で学校が休校したため、学生たちはこぞって避難所でボランティア活動に参加した。毎日、住民の期待に沿って、慈済は炊き出しの献立看板を作った

震の恐怖の中、これから先どうしたらいいか分からなかった。諸々の複雑な感情が胸中に鬱積していたが、彼女は地震発生から十数日後の今日、初めて涙を流した。

日本テレビ系列の熊本県民テレビ局は、慈済ボランティアの炊き出しと被災者への付き添いをカメラに撮っていた。彼女が慈済ボランティアと抱擁し、十数日間の緊張がとけて涙を流した時、プロデューサーはやっと、どうして慈済ボランティアが遠くから飛行機に乗って炊き出しに来るのか分かった。彼はボランティアが真心でこの世に愛を満たそうとしていることを感じた。

震災後、慈済は延べ八十人のボランティアを動員し、合計千五百人分の炊き出しを行った。私たちが作ったトマト野菜スープは住民たちが野菜を摂取し食欲を

●大津町の避難所で子供ボランティアがお年寄りにお茶を入れ、言葉を交わした。

増進させるのを助け、また、中華風味のベジタリアン酢豚や搾菜スープ、八宝菜なども提供した。また、日本の食文化に沿って、即席飯でおにぎりや手巻き寿司を作った。住民はボランティアの細やかな心遣いに感謝した。「こんな危険な所に来てくださって、ありがとうございます」

体育館の外で空や芝生、遠く周囲を囲んだ阿蘇山を眺めながら、小さなボランティアたちは床に這いつくばったり座っ

がんばれ！

たりして食事の献立を知らせる看板をデザインし、挿絵も入れた。

子供たちが帰る時、お母さんたちにありがとうと言うように、と念を押してから慈済のマイカップに静思茶を入れて持たせた。大人たちに子供が私たちと一緒に何をしているのかを知ってもらうのも大切なことである。高校一年生の小山田雪乃さんのお母さんはわざわざ、子供に奉仕する経験をさせてもらったことを感謝しにやって来た。「子供が国際的なボランティアと知り合いになったことは人格の成長に役立ち、多くの友人もできたようです」

四月二十九日、野菜の準備の合間に、子供たちは楽器演奏を練習することを承知してくれた。初め、「本当に演奏するのですか？」と突然の要望に子供たちは悲鳴を上げた。「皆、知っているように、お爺ちゃん、お婆ちゃんたちはにぎやかなのが好きなのと、君たちの笑顔を見たいの」と説得する私たちに勝てず、結局、子供たちは承諾した。

昼頃、家から楽器を持って来る子がいた。そして、私たちが近くの百円ショップで買った楽器を付け加え、即席のミニ楽団が出来上がった。長年、管楽を学んできた王美玲師姐が指揮を勤め、楽団は体育館の片隅で練習した。

四月三十日、楽器を吹き鳴らしながら列を作って体育館に行進してきた。翌日に体育館の整理を控えたこの町に一風変わった幸せな時をもたらした。コンサートの来賓はお年寄りたちであった。練習時間も少なく、短い三分間の曲だったが、会場は大いに盛り上がり、避難所は元気な声に溢れた。

お爺さん、お婆さんたちは皆、声を上げて笑った。演奏が終わると、子供たちは一人ずつお年寄りの肩を揉んだ。「もういいよ、ありがとう。手が疲れただろ？」。どの子供もほとんど同時に「いいえ、大丈夫です！」と答えた。

そのお返しにお婆さんが童謡の「ふるさと」を歌った。その時、避難所がふるさとになり、皆が家族になった。ありがとう、お婆さん！　ありがとう、被災地の愛の天使たち！

前向き、それとも及び腰

◎口述・周昀螢（花蓮慈済病院呼吸センター看護士）
記録・張相生、黄玉櫻／訳・心瑩

プレッシャーに直面し岐路に立たされた時、一丈先に到達できるかどうかを恐れることよりも問題なのは、一歩も前に進まないことです。

病院の後輩に、私が看護師になった経歴を聞かれました。ふっと考えてみると、二日前がちょうど看護師になって一年目だったのです。「先輩、この一年間で挫折を感じたことはありましたか。それ以上先へ進めなくなることはありませんでしたか」とさらに聞かれました。「あったわよ。その時は、看護師を辞めようとも考えたわ」と私は答えました。

新米の看護師として仕事に就いた頃、毎日ナースステーションに入って、その日にケアする患者さんのカルテなどに目を通しながら、頭の中に思い浮かんでくるのは、自分のせいで患者さんの命取りとなったり、病状が悪化してしまったりするのではないか……など、マイナス思考ばかりでした。そして、私は、医師や患者の家族に向き合う時どのようにすればうまく説明でき、お互いに理解しあえるのかと考えると緊張感が高まり過大なストレスのため、まるで首をビニール袋につっこまれて息がつまり呼吸困難になったように感じることがありました。帰宅すると、部屋の隅っこにうずくまって涙が止まらなくなり辛い日々でした。

自分の無力さを痛感し、本当にこのまま看護師を続けていいのだろうか？

仕事にちゃんと自信が持てるだろうか？　と自問自答した私は、看護師という仕事を辞めようと考えました。そのような時、ある看護部長が私に勇気

をくれました。宜静先輩というその看護部長は、自信を喪失してどん底に沈んでいた私の様子に気づいていたようでした。

新人に対しては、「あまり考えすぎないで！　過去の私もそうだったわよ！」と言って、頭をなでて慰めてくれるのが普通だと思います。ですが、宜静先輩はそうはせず、さらに大きなプレッシャーを私にかけました。「昀螢さん、精神的なプレッシャーが大きいことはよくわかっていますが、看護部が主催するコンテストがあるのよ。いっしょに参加しない？」と誘ってくれました。私は適当に「いいですよ」と口先だけの返事をしましたが、本心は、明日にも辞表を提出しようと考えていました。

ところが、看護部長は私と同僚を率いてコンテストをやり遂げました。作品が完成するまで、看護部長は私たちと、原稿を書いたり校正したり、寝る時間を削って控室で共に取り組んでくれました。準備の過程の割合を考えてみると、看護部長がほぼ九十五％やってくれ、残りの五％は私が壇上に立って報告しました。彼女の支えにより、看護部のたくさんの優秀な参加者を押さえて私たちが優勝したのです。

結果、自分が取柄のない人間ではないことがわかり、私はとても嬉しかったです。どんなことも一歩を踏み出し努力すれば、事を成し遂げることができるのです。陰で私を支えてくれた先輩や同僚にも感謝の気持ちで一杯です。

このような自分の経験を生かして、「日常生活の中で困難に遭遇することがよくありますが、この時こそ、身を引くのではなく前向きの姿勢を心がけてください。『一丈先に到達できるかどうかを恐れることよりも問題なのは一歩も前に進まないことです』という静思語のように、前向きに一歩一歩努力すれば、必ず大きな成果が得られるのです」と後輩を励ましました。

難民が通り過ぎて行く セルビア

◎文・鄭雅嬬／訳・済運／撮影・蕭耀華

中東からの難民はバルカン半島を経由して西ヨーロッパを北上するかドイツに亡命を申請するかしてきた。しかし、今年の三月、多くのバルカン諸国が国境を閉鎖したため、難民は行き場をなくしてしまった。セルビアの中継地で「我々は人間である。ここから出せ」と書かれたプラカードを持って彼らは叫んだ。この広い世界のどこに行ったらいいのか？

私たちは台北を出発し、トルコのイスタンブール経由でセルビアの首都ベオグラードに着いた。空港を出ると慈済ボランティアが予約したタクシーに乗り、一路北へ目的地に向かって走った。

ドライバーは私たちが観光客ではなく、ボランティアと落ち合って中東からの難民のケアに来たことを知っていた。道中、彼は大いに私たちと解決困難な難民問題を大いに語り合った。「今回の難民で政府は大きなプレッシャーを感じています。経済的にいいわけではなく、難民の世話をする余裕がないのです」と彼が心配そうに言った。

セルビア共和国は以前、ユーゴスラビア共和国の主要な地域だったが、十年前にユーゴスラビア・モンテネグロから独立し、現在は社会主義から資本主義に移行する段階にあって、経済は疲弊し、政治と報道は閉鎖的である。

セルビア難民事務局はユーゴスラビアの内戦で発生した難民を支援するために設立されたのだが、今は大量の中東難民が通過したり亡命を求めたりしており、政府にとっては全く新しい経験であると共に挑戦でもある。

二〇一五年、主にシリア、イラク、アフガニスタンからの難民百万人が「バルカン経路」を使い出した。トルコから海を渡ってギリシアに行き、マケドニア、セルビア、ハンガリー、クロアチア、スロベニア、オーストリアを通って最終目的地のドイツや他の西欧諸国に到達する道である。

セルビアだけで五十万人の難民が通過した。昨年の九月、ハンガリーが国境を閉鎖してから、難民は方向を変えたが、それでも毎日、四～五千人の難民が冬に入ってもセルビアを通過点にした。彼らを収容するため、セルビア政府は三カ所の中継地を設けた。その中の一つは南部のマケドニア国境に近いプレセボにあり、もう二つは北西部で、クロアチア国境沿いのシドとアダセビシにある。その二つが今回、慈済ボランティアが防寒服の配付を始めとするケア活動を重点的に行う地区である。

東欧、南欧の数カ国が難民の受け入れを制限

三月、バルカン半島は寒暖の差が激しく、朝晩の気温の差は大きく、時には雨がぱらつくこともあった。

朝七時頃、高速道路のガソリンスタンド脇にあるアダセビシ中継地の数百人を

●寒風が吹く中、身なりを整えた難民は家族と共にセルビアを離れるバスが来るのを秩序正しく並んで待っていたが、その目は見えない前途を見据えていた。

収容できるテントの中から大きな声が聞こえて来た。セルビア難民事務局の職員が通行許可証の発行に関する内容を説明したり、難民からの質問に答えていた。

子供を連れた数人が大小の荷物を持ってこそこそとテントから出て、かなり大きい室内休憩所で腰を下ろした。大人は心配そうな顔をしていた。夜よく眠れなかったのか、それとも先の見えない先を心配しているのだろう。子供は薄い服しか着ておらず、鼻水を垂らし、お腹が空いたとぐずった。

四十五歳のモハメドは慈善団体から配給されたパンと紅茶を食べながら、手に持っていた携帯電話を見て笑顔を見せた。シリアでコックをしている友人から送られて来た故郷の料理の写真である。

モハメドはシリアを離れてはや半年になるが、未だ安住できる所に行き着いていないため、以前の安定した日々をとても懐かしがった。その日、彼は一緒に来

●シド駅の外には、長い間、留まって離れることができないシリア難民のシアド親子がいた。

難民が通り過ぎて行くセルビア

●ボランティアがシド中継地内のテントに入ると、一つひとつベッドを廻って挨拶した。言葉が通じなくても抱擁と笑顔で思いやりと愛がお互いの間を流れた。

た友人と期待した通り、シド駅に向うバスに乗ることができた。彼らは慈済ボランティアが配付したジャケットとマフラーを付け、通行許可証を持って順調にクロアチアに向う汽車に乗り、北へ向った。

しかし、誰もが彼らのように幸運なわけではない。シリアやイラク、アフガニスタンから来た難民には、シド駅から歩いて五分足らずのシド中継地に留まっているが、駅に来ても書類や身分証が適合しないために警官に引き止められる人や、何回も拒絶され、その場で泣き出し、荷物を持ってがっかりした様子で中継地に戻る人もいた。

慈済ボランティアはその日の午後、中継地で防寒服の配付を行う予定だったが、難民の情緒の起伏を考慮して、一つひとつテントに入って彼らの話に耳を傾けることにした。

もっと残念なことは、その数日後、マケドニアが予告なしにギリシアとの国境

●早朝、慈済ボランティアはホテルの前に整列し、その日の難民への配付とケアの準備に取りかかった。

●長距離バスでセルビア、アダセビシ中継地に着いたばかりのあるシリアからの一家は疲労のため、高速道路脇の空き地にうずくまっていた。ボランティアは寒くないかと彼らに聞いた。

を閉鎖してしまったことだ。その近隣諸国も次々に国境を閉鎖し、何万という難民がギリシアに足止めされ、「バルカン経路」上の難民は動くに動けなくなってしまった。ザリアを含む二千人余りの難民はセルビアに留まることを余儀なくされた。続く三月と四月、二度とシド駅からクロアチアに向う汽車が出発することはなかった。

世界中の慈善団体が駐留して世話している

年初の冬の間、ドイツの慈済ボランティア、范德祿と妻の陳樹微、そして、娘の陳無憂は二度、ミュンヘンからセルビアのベオグラードに出かけた。車で十三時間かけてセルビアの難民事務局を訪れ、防寒服を難民に配付する手筈を話し合った。

●ボランティアは列の前方で難民から一枚ずつ慈済のロゴが入ったシールを受け取り、彼女たちは引き換えに体のサイズに合った防寒服を満足そうに受け取った。

●慈済ボランティアが中継地で冬服の配付を行った時、毎日、様々な困難に遭遇した。ボスニアからのボランティアが物資の運搬や補給を手伝い、常時、会場の状況に従って、仕事を買って出た。

彼らは忍耐強く事務局の職員に慈済を紹介し、規定通りの配付活動の許可証を申請した。また、何回も現地の工場と物資の品質、値段、納期を確認した。準備作業が終わり、第一回目は十一カ国から四十六人の慈済ボランティアがセルビアのシドに集結した。

三月一日から十日間で一万着のジャケットや帽子、マフラー、靴下など防寒用衣類を配付する予定だったが、思いも寄らず、国境が閉鎖されてしまったため、最終的に二千八百三十枚しか配付できなかった。「一日に千人の難民がセルビアを経由する計算でしたが、結局、一日目はバスが一台しか来ず、六十人ぐらいでした。続く数日も一番多かった日でも四台止まりでした」と陳樹微が溜め息をついた。

アダセビシ中継地の難民の移動量は最も多い時、六十台のバスが国境を越え、平均して二十四時間滞留するだけだった。各国政府が方針を変えてからは、難民事務局でも一日に出入りする難民の数を把握できなくなった。

逆にドイツのボランティア、鍾家隆は楽観的だった。「大きな環境の変化は私たちにはどうしようもありませんが、人数が減った状況下では、ボランティアは逆に難民のニーズを満たすことができます。難民は自分のサイズと好みに合った防寒服を得ることができるからです。彼らが温かい服を着て喜ぶ姿を見ることも配付の意義達成にならないでしょうか？」

ボランティアの中で十六人はボスニア・ヘルツェゴビナのサマク町から来ていた。彼らは二〇一四年のボスニア大水害で慈済の支援を得た被災者である。ヨ

ーロッパ慈済ボランティアが国境を越えて支援している事に感動し、市議会議長であるプレドラグ・マリンコビック氏が先頭に立って、隣国で支援している慈済の隊列に加わったのだ。

彼らは皆、若くて力強かった。荷物運びや周辺の清掃、秩序整理などを進んで引き受け、団体の中でも重要な助っ人となった。

慈済の他、中継地には国連難民高等弁務室や国境無き医師団、赤十字社、ワールドビジョン、マーシーコープス、レマーS．O．Sなど世界各地の団体が来ていた。彼らが駐留している期間はもっと長く、様々なサービスを提供している。

ボランティアは他の慈善団体とも接触をしている。イギリスのボランティア、李宏耀はこう言った、「私たちは難民の世話をしに来ていますが、他の慈善団体と交流することはとても大切なことで、お互いに提供しているサービスや精神的理念を学ぶべきです」

今日、汽車は来ますか？

「バルカン経路」上にある国々が国境を閉鎖した情報が中継地にも広がって難民たちに暗雲が垂れ込め、連日の冷たい雨模様が加わって状況はさらにひどくなった。

ボランティアが一番よく難民に聞かれるのが、「今日、汽車は来ますか？」という質問だった。一部の難民は未だに一縷の希望を抱き、毎朝、荷物をカバンにつめ、駅で地べたに座って待った。時折、首を伸ばして線路を眺め、汽車が来ることを期待した。

昼食時に難民が長い列を作って食事を

●加熱して食べる調理パックを提供するほか、ボランティアは一人ずつ難民がそこの食事に慣れているかどうかを心配した。そして、優しく幼い女の子に食事を与えた。

もらっていた時、イラクから来たチャワン・バクティールは横で見ているだけで、列に加わろうとしなかった。「食べたくないわけではありませんが、食べ慣れないものだし、食べ飽きたのです」と彼女が言った。

チャワンは皆が思っていることを口にした。彼らがもらう食べ物はパン、ビスケット、缶詰、ミネラルウォーターで、冷たくて代り映えしないため、最終的に食べ物はゴミ箱に捨てられてしまう。

チャワンは幸運な方である。部屋に戻ると母親が登山用の早炊き鍋でご飯を炊き、トマトと卵、鶏肉を入れて加熱したものとレタスとチャパティを付け、一家揃って食事を始めるところだった。

中東地域からの人々は多くが穀物や米を主食にしている。今は国を離れて流浪しているため、熱々のご飯は彼らの最も望んでいるものである。

慈済は第一段階で冬服の配付を終えた後、第二段階の炊き出しを始めた。まず、現地で総菜パックを仕入れ、キャンプに持ち帰り、温めてから難民に提供した。しばらくして、即席飯が台湾から届くと、ボランティアは即席飯を提供した。

慈済ボランティアの楊文村はドイツのハンブルクで三十年レストランを経営してきて、確かな調理の腕前を持っている。今回の配付活動ではボランティアの昼食と夕食を引き受けてくれたほか、詳細に難民の食べ物に対するニーズを聞き取り、絶えず料理の仕方に変化を盛り込んだ。

「彼らはトマト味を好み、味付けも多少濃い目で、ぱらぱらのご飯とおかずは分けて食べます」。楊文村はボランティアは難民のためにスーパーマーケットへピクルスとヨーグルトを買い出しに行った。思いやりのある食事は好評で、食べ物が捨てられることはなくなった。

●大規模に即席飯を提供する前、ボランティアは試食会を設けて、シリアやイラク、アフガニスタンからの難民を招いて味見してもらい、意見を聞いた。

●駅の外を見渡すとほとんどが行動の不自由なおばあさんや無邪気な子供を伴った人たちであった。故郷を離れて久しいが、目的地までまだ、ほど遠かった。

全てを分かち合い 各自、前に向って進む

難民と接触する機会が多くなって来たため、ボランティアはアラビア語、英語、中国語の三つの言語で書かれた《静思語》のカードを用意し、冬服を受け取った後、引き抜いてもらうようにした。

「私は『人生に煩悩があるのは、全て貪、瞋、癡の三つの毒に由来している』という言葉がとても好きです。この言葉はシリアの内戦がそうであることを思い起こさせてくれます」。一家五人を連れて故郷を離れたアラディンは期待を込めて話す。戦争は五年で終わるはずだと思っている。国民が家に帰れず、国外で放浪していてはいけないと。

配付活動する以外にも、ボランティアは頻繁に中継地を訪れて難民に付き添い、大人たちの故郷への思いや戦争の無情に対する話を聞いた。そして、子供たちにはボール蹴りやお絵描き、ドイツ語の学習などに付き添った。また、「皆、家族」と「愛と思いやり」という曲の手話を教え、ボランティアと難民は共同でそれらの歌詞をペルシャ語とアラビア語に翻訳して内容をよりよく理解してもらえるようにした。このような行動がお互いへの友情を深めることになった。

数人のシリア人青年は平均年齢が二十三歳だった。故郷では友人が戦争で重傷を負って死んだのを見てきた人や理由もなしに警察に逮捕されて刑務所に入れられた人、トルコで低賃金で長時間労働の縫製工や皿洗いをしている人など様々である。彼らは年齢に比べて重過ぎる生命の運命を背負っている。しかし、それでも大変な苦労を伴う旅の途中で、心

難民が通り過ぎて行くセルビア

●一度きりの巡り会わせであっても、ボランティアは機会を逃さず、声をかけて温かい冬服を送り、難民がバスで目的地に向って出発するのを見送った。

を開いて他人の思いやりを受け止めると共に、自分が持っている全てを分かち合うことで報いているのだ。

敬虔なモスリムである彼らは毎日、五回の礼拝を忘れることはなく、それによって心の平静を保っている。「私たちは全てをアラーが賜った試練だと思っています。皆、順調に乗り越えられることを信じ、一日も早くドイツに行けるよう祈っています」と彼らが言った。

◆◆◆

十五カ国から延べ八十八人の慈済ボランティアがセルビアの中継地に三十四日間駐留したが、どんなに気にかかっていても難民たちに別れを告げなければならなかった。その期間中、体調を悪くした人や生活に忙しい人もいたが、皆、同じように離れるのが名残惜しく、飛行機の予約を何度も延期したり、ビザを何度も取り直したりした。また、帰国しても再び、参加する人もいる。

「今回、難民たちの苦労話や思いを聞いて、やっと徐々に彼らが逃れて来た背景を理解できるようになりました。自分で相手を深く理解して初めて身に沁みて感じることができるのです」とドイツのボランティアである蔡婉珍が感想を語った。

中東での残酷な戦争もヨーロッパにまで及んでいる難民危機も、平穏で平凡な毎日を送っている私たちには何もなかったかのようだ。

冬服の配付と炊き出しでできるケアに限りがあっても、愛と思いやりで以て、他の人生を理解することは意義のあることである。

―いつ困難に出会うか、安まる時がない―

シド中継地の大型テントは前後に出入り口があるだけで窓はない。密閉した空間に体臭や食べ物の匂い、流行感冒などのウィルスに満ち、数百人が常時そこで呼吸している。その上二十四時間暖房がついているため、テントの中はむっとするような汚れた空気が充満し、咳をする声もあちこちで聞かれる。

シリアから来た老婦人と青年は荷物と一緒にテントの入り口近くで寝た。やっと新鮮な空気が吸えた。しかし、彼らに安住できる場所はまだ、見つかっていない。中継地にいる時間が長くなればなるほど、心配と焦り、恐怖が知らず知らずのうちに覆い被さり、その陰影を振り払うことができない。

難民が通り過ぎて行くセルビア

慣例の公務

外は風が冷たかった。シド中継地の難民は毎日３回、決まった時間と場所で整列し、難民事務局の職員が慈善団体からの食糧を配付するのを待った。

整列するのもテクニックがいる。素早い動作と細心の注意が必要である。というのも、食糧の数に制限があるため、誰かに割り込まれたら、運悪くもらえなくなる時もある。難民が食糧のことで言い争ったり、喧嘩するのは日常茶飯事である。

彼らはビニール袋を開けると、湿ったパンを冷たいミネラルウォーターで流し込む。お腹が空いてるのか満腹なのか分らない。ビスケットや缶詰は取っておき、後でお腹が空いた時に食べる。同じような食べ物はこれで何日目になるのかもう、覚えていないが、明日も同じものを食べることだけは分かっている。

難民が通り過ぎて行くセルビア

一砂埃が舞う中一

シド駅の外で一部の難民は長く待たされた挙げ句、何度も書類の審査を受けた末、やっとクロアチアに向う汽車に乗ることができた。泥がこびりついた古びた列車は、あたかも彼らが歩んで来た困難な道を無言で回顧しているようだった。

次の駅では素晴しい未来が待っているのだろうか？　こう聞こうとする人はなく、答える人もない。ただ、運命の歯車だけが彼らを前へ押しやっているだけで、時間で解決するしかない。

菩薩の絆を縫い合わせ 雑念を打ち払う

◎文・釋徳仉／訳・黒川章子

善の根をはり、雑念を打ち払いましょう。
善い縁を結び、菩薩の絆を縫い合わせてまいりましょう。

花蓮県万栄郷に住む林さんはまだ五十代です。日雇い労働に出て生活していましたが、奥様が病気で亡くなら

れてからというものすっかり気落ちし、毎日酒浸りになり、挙げ句の果てには半身不随を患って仕事もできなくなってしまいました。

瑞穂郷の慈済ボランティア蔡秀鳳さんが林さんの家の前を通りかかった時のことです。彼は床に倒れ何かを口走っていました。「頼む、助けてくれ！」と。蔡さんは彼が酒に酔っているのだと思い、そのときは避けて帰りました。しかし帰宅してからは何とか助けてあげられないだろうかと気がかりで二、三日眠れない日が続いたので、やはりボランティアの仲間と共に訪れてみることにしました。家に入ると十字架やイエスキリストの絵が張ってあり、彼はキリスト教徒なのだと分かりました。まず彼に正直に自分と向き合うこと、毎日飲んだお酒の量を記録することをお願いし、家で資源回収の分類をすることを勧めました。しかしお酒をやめさせることは簡単ではありませんでした。蔡さんはあ

きらめそうになりましたが、師匠の言葉を思い出しました。「種はまいた後、長い時間をかけて育ててはじめて大樹になるのです」。やはりケアをやめてはいけないと思い直しました。数年を費やし、林さんはやっとお酒の量を減らすようになりました。また、自分から瑞穂リサイクルステーションのボランティアを志願したのです。飲んだくれだった人がリサイクルボランティアに生まれ変わったのでした。

朝の勤行にて上人様はおっしゃいました。「娑婆（しゃば）というところは五道の存在が雑居しているといえます。衆生は皆清らかな本性を持っているのですから、根機に合わせてあきらめずに導いてやらなければならないのです」と。「一人でも多くの人を救いましょう。一人救えば良い人が一人増えることになるのですよ。さらに多くの人が努力を惜しまず貢献するようになれば、この社会は一層住みやすくなるでしょう」

「人生がどれほど苦しくても、雑念に取りつかれてはなりません。心を広く持ち、心から深く人々の幸せを願う気持ちを奮い起こして、菩薩の絆を繋ぎ広めていくのです」。上人様はどんな人も見捨ててはならないと言われました。「煩悩や雑念を徐々に解き放ち、本来の清らかで善良な自分に戻るのです。そうすれば社会のよどんだ空気も簡素で素樸な流れに変わることでしょう」

善を讃え伝える

このところマケドニアとスロバキアでは大雨が続き、その上難民受け入れ政策が変更されたため、多くの人々が両国の国境で足止めを余儀なくされています。大雨だというのに簡易テントに身を寄せ合うしかなく、寒さに凍えているのです。上人様は難民の境遇をひどく嘆かれました。そして遠いヨーロッパへ赴いてその

ような悲惨な歴史を検証し記録する使命を自ら背負うボランティアの同胞に感謝しておられました。

ボランティアは以前東日本大震災の被災地を訪れたことも話してくれました。津波から五年後、ある被災者が当時慈済の慰問メンバーが配付したカードを亡くなった奥様の御霊前に供え、慈済ボランティアに深く感謝の意を表していることを知ったそうです。

上人様は、当時は見舞金を入れる封筒にも心を配ってデザインしたこと、お見舞金だけでなく名刺型ＵＳＢや慈済の歌「祈り」「愛と介護ケア」の日本語版なども用意したことを取り上げられ、「その当時は被災者の方々に、救助してもらうのではなく、友人からの気遣いだと思ってもらえるように、心配りをしました」とおっしゃいました。

科学は発達し、現代人は携帯電話を肌身離さず持っているので、いつでもインターネットで情報を得ることができます。上人様は慈済の人文事業部が「正しく真実を報道する」という責任を全うし、より多くの人々に愛の心を啓発することを願っておられます。「菩薩達は繋がりを強く持ち、雑念を打ち払って愛と善を世の中に相広げ、人々の心を清めましょう」

愛は啓発されるもの

東日本大震災から五年が過ぎ、原発の放射能制御の難しさが指摘されています。今日に至ってもまだ放射能汚染警戒地域は広範囲に広がっており、帰宅できない人々がいるのです。

十一日の朝会では、慈済の災害支援団が危険を冒して放射能の数値の高い地域の支援に赴いたこと、救助の後も、日本の慈済支部と協力して毎年少なくとも二回仮設住宅を慰問に訪れている

ことをお話しになりました。

五年が過ぎても、日本の人々は原発に対して恐怖と心配を抱いています。ただ被災地の人々は今も台湾からの温かい支援を忘れてはいません。今年の二月に起こった台南地震の時は、率先して義援金を募り、慈済を通じて台南政府に届けてくれました。

「愛は互いに啓発し合うもの、それが人道精神の礎なのです」。上人様は慈済人の誠の愛が国境を越え、見返りを求めず人々に尽くし、衆生を助けていることに感謝を表されました。衆生が救われる様子を目にすることこそこの上ない喜びだとおっしゃるのでした。

（慈済月刊五九三期より）

慈済大事記四、五月

……訳・済運

◎慈済科技大学の学生３０人余りが「愛でシリアを支援しよう」と題した難民を支援する活動を展開した。１０時間絶食すると共に多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を使って難民の生活環境を体験する活動である。

０４・２７

ちょうど慈誠懿徳日に当たり、慈懿会のボランティアと学生が大勢、愛

を発揮して募金に応えた。
◎エクアドル北西部の近海で、16日午後6時58分（日本時間17日午前8時58分）、マグニチュード7・8の地震が発生し、同国マナビやエスメラルダス省が大きな被害に見舞われた。慈済基金会はアメリカ、チリのボランティア九人を視察に派遣した。27日、エクアドルに向けて出発し、マンタ、ポートヴィエホ、カノア、ペデルナレスなどを見舞い、災害状況を視察した。

04・30

◎エルサルバドルの慈済ボランティアはサカコユ大愛一村の集会場で村民への施療活動を行い、150人余りが訪れた。
◎慈済アメリカ・北カリフォルニア支部と人医会及びカリフォルニア大学サンフランシスコ校（UCSF）の歯科学生が、イーストメンロパーク市のベラヘブン小学校で虫歯予防に関する衛生教育を行った。学校に通う低所得家庭の生徒と歯科治療保険をかけてない大人を含む46家族を対象に、フッ素の塗着と口内検査及び衛生教育を行った。
＊慈済50周年記念行事では、花蓮静思堂で「慈済五十・無量義」経典劇が催された。内容は慈善活動の記録映像と演劇にある動作を融合したもので、ナレーターが《無量義経》の〈徳行品〉と〈説法品〉を読み上げ、参加者に慈済がどのようにしてこの半世紀、困難を乗り越えて来たかを理解してもらった。その日、馬英九総統自らが祝賀会に訪れ、證厳法師に「淑世済度」と書かれた額を贈呈した。また、アメリカ国土安全部・宗教及び隣国センターのデビット・マイヤー主任がオバマ大統領直筆の祝辞と感謝の書簡を手渡した。このほか、三重、板橋、関渡など八カ所の静思堂とネット回線が繋がれ、同時ライブで演劇を行った。
◎慈済50周年記念行事で、花蓮本部では1日から30日まで静思精舎

	で33回もの「朝山」及び「繞仏」修行が行われ、全世界24の国と地域で約16500人が参加した。30日には《薬師経》の読経が行われ、全世界14の国と地域の143の地域道場とネット回線を繋ぎ、同時ライブで修行し、合計18000人が参加した。
05・05	カナダアルバータ州フォート・マクマレーで森林火災が起き、多くの住民が避難を余儀なくされた。カナダ・トロントの慈済ボランティアは5日と10日にグローバルメディック会と協力し、生活物資の梱包や避難所への輸送を行った。手伝った梱包の数は7千人分に及んだ。
05・06	慈済基金会はエクアドル地震の被災者を支援するため、6日から14日までマナビ州ポートヴィエホとマンタの2カ所で被災者に1日1人につき15米ドルの日当を支払う、災害復旧計画、即ち、街の清掃に参加するよう被災者に呼びかけた。8日間で延べ13694人が参加した。
05・07	カナダ・アルバータ州フォートマクマレーの森林火災でカナダ慈済支部は災害支援を決定した。11日から23日まで全国26のスーパーマーケットで被災者を支援する募金活動を開始した。
05・08	慈済50周年目の「仏誕節、母の日、慈済の日」の3つを合わせた灌仏会は花蓮の静思堂で始まり、證厳法師の主催の下にボランティアや地域住民及び慈済志業体職員約3800人が参加した。23日まで、世界38の国と地域で合計505回行われ、26万人余りが参加した。
05・09	アメリカ、パラグアイ、ブラジル、アルゼンチンからの慈済ボランティア10数人がエクアドル地震の2回目の支援チームとして、本日の夜から翌日の朝にかけてエクアドルに順次集結する。

０５・１３	イギリス北中部のヨーク市が２０１５年１２月の大雨で部分的に浸水したため、マンチェスター慈済ボランティアとヨーク旅行会社は共同で、今日、ジェームス通りのキャラバンパークの住民に災害見舞金と小物を配付した。
０５・１４	◎エクアドル震災で慈済災害支援チームはマンタ市で１０００世帯の弱者家庭に対してベビー用栄養食と衛生用品を配付した。ジョージ・ザンブラノ市長は慈済の支援に感謝し、慈済基金会に対して栄誉市民証書が贈呈され、慈済ボランティアの林玉娥が代表で受け取った。 ◎アメリカ、ヒューストンのウォートン市は４月の大雨で被害が出た。テキサス慈済ボランティアはジャストドゥーイットナウ団体と協力して、この日、６１世帯の被災者に現金カードと毛布を配付した。
０５・１５	タイ、チェンマイ府マエアイ県ジャナ村で４月１２日火災が発生し、数多くの学生が制服をなくした。この日、慈済ボランティアはチェンマイ慈済学校の父兄や教師、生徒と共にジャナ村小学校を訪れ、７８人の生徒に学校の制服とボーイスカウトの制服などを配付した。
０５・１７	慈済エクアドル震災支援チームは１７日から２１日まで、マナビ省サンビセンテ市カノア町で、日当を支払って街道の清掃を行う被災者雇用制度を実施し、被災者による復旧活動を行った。５２７８人が参加した。

何年も続けて旧暦の毎月二日と十六日に土地公（神）を拝んでいます。今、仏教徒となって仏だけを拝んで神を拝まないのでいいんでしょうか？ 神を迎え入れるのは簡単でも送り出すのは難しいと言われます。

貴方自身、心から仏教を信じて念仏しているかどうか、です。宗教によっては疑心暗鬼になり易いのです。心に疑問があれば何もかもうまく行きません。平然として念仏だけしていれば何事も起こりません。

絵・蔡志忠／彩色・慮扶
訳・済運《清らかな智慧》より

慈済

2016年6月17日発行・２３４号

中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄

Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立徳路2号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9920
E-mail:　019874@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒169-0072　東京都新宿区大久保1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail:　jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。（日文組編集同人）